

地域医療

九州がんセンター (福岡県)の がん地域連携



総合的で手厚い支援体制 の確立を目指して

がん治療に欠かせない地域連携



「使命を果たすには、地域連携は必須です」。そう語るのは福岡県がん診療連携拠点病院である九州がんセンター副院長の古川正幸医師です。NHOの全142病院のうち、がんのみに特化して医療を提供している病院は3病院（ほかに北海道と四国のがんセンター）です。その中で九州がんセンターは九州で唯一のがん専門施設として、“病む人の気持ちを”（初代院長の言葉）そして“家族の気持ちを”（2代院長の言葉）尊重しながら、広く九州や中国・四国地方からも患者さんを受け入れています。

今や約60%のがん患者さんが治る時代であり、がんはもはや死を覚悟する病気ではありません。ただ、治療には長い時間が必要な場合も多く、同センターでは、いつでも相談できる身近な“かかりつけ医”をもつように呼び掛けています。なぜなら医療機関同士の強固な連携が、患者さんへの継続的な医療の提供・支援には欠かせないからです。

その連携先の“かかりつけ医”が同センターの「連携・協力施設」であり、その数は456施設（2017年11月2日現在）に上っています。福岡市内はもちろん近隣の市町村にも拡大させ、地域バランスも考慮しながら、さらに増え続けています。もちろん、連携先以外の医師からの相談も多く、患者さんに「安心できる体制を提供したい」という医療関係者の希望に応えています。



連携を拡大するためのユニークな工夫

古川副院長によると“国立のセンター”からか、「自分でも診てもらえるのだろうか」とか「自分の患者さんを紹介してもいいのだろうか」といった“敷居が高い”という先入観がある患者さんや医師もいるそうです。そこで同センターでは、がん患者さんであれば紹介可能な通常の病院だとアピールするために、どんどん病院の外へ出かけており、その結果として生まれているのが「連携・協力施設」なのです。

訪問はちょっとユニークで、医療連携室の担当者は必ず院長の名刺を持参します。「院長の代わりに来ました」と告げながら手渡すその名刺には、一枚一枚手書きで「いつもありがとうございます」などと一言添えてあるのです。

訪問には幹部医師や診療科部長を中心として、ほぼ毎回、医師が同行します。同センターは設立以来、臓器ごとの専門病棟を設置しており臓器別に高度な専門・最新医療も提供できるので、その場で専門的な質問にも答えることができます。例えば、アンジェリーナ・ジョリーさんが手術を受けたことで話題となった、家族性腫瘍（遺伝するがん）に対する卵巣がんのリスク低減治療などにも取り組んでおり、同じ専門領域の医師による具体的で丁寧な説明により訪問先の医師も安心してくれ、訪問後すぐに「患者さんをお願いしたい」と電話がかかってくることもあるそうです。

がんセンターとしての多様な役割



古川副院長は、連携はあくまで使命の一部だとも語ります。国のがん対策の基本的方向を定めた「がん対策推進基本計画」（第3期）を具体的に推し進め、地域の住民や医療施設に啓発していくことも使命のひとつです。また、高度な知識をもつ看護師たちが中心となって、緩和ケアや在宅移行といったテーマについて他院の医師たちとの勉強会を頻繁に開くことで、地域での支援体制の底上げにも取り組んでいます。



あるいは、患者さんやご家族が治療と生活を両立できるよう就労支援することも大きな役割です。その役割を担うのが院内の「患者・家族支援センター」であり、総合的な相談・支援に対応しています。医師・看護師はもちろん、臨床心理士・メディカルソーシャルワーカー（MSW）などが連携して患者さんやご家族を支えており、昨年の7月からは社会保険労務士（労働や社会保険に関する専門家）も加わり、就労に対する支援体制がさらに強化されました。また、臨床心理士が中心となってチャイルドサポートにも力を入れており、キッズ・フェスなどを通じて、がん患者さんの子どもたちを心理的にサポートしているのです。



進化途中の九州がんセンター

ただ、「人生を通じた支援体制はまだまだ」と竹山由子相談支援係長(看護師長)は話します。がんと共に生きる切れ目のない支援、という同センターの目標をより強固にするには、認知症もあるがん患者さんの包括的なケアをどう確立するかなど、取り組むべき課題はまだまだある、というのが植松裕事務部長も含めた3人の想いです。

また、古川副院長は「がんの分野では均てん化の中での集約化が必要」といいます。九州においても(全国どこでも)最新の医療が受けられ、拠点としてノウハウを九州の他の病院にも広めていく、その一方で、がん治療・支援の拠点としてさらに進化させる、ということであり、NHOに課せられた大きな使命なのです。

九州がんセンター内にはこんな施設も！



がんについて調べられる図書館があり、福岡市総合図書館と共催で医療情報セミナーを開催するなど、市民・県民へのがん情報の発信にも力を入れています。また、国立がん研究センターのアンケートでも、患者さんが最も辛いと答えたのは外見の変化。ウィッグの相談や爪のケアに対応しているアピアランスケアルームや、癒しの映像も楽しめる患者サロンを活用してもらうことで、患者さんの心理的な負担軽減にも心を砕いています。



■九州がんセンター（福岡市）



許可病床数411床

九州唯一のがん診療専門施設。“温かく思いやりのある、最良のがん医療”を提供し、スタッフを含めたすべての人に優しい日本をリードするがん専門病院を目指している。肺がんやATL（成人T細胞白血病・リンパ腫）の免疫治療など、がんの治験ではNHOの中でもトップクラス。